

水泳部の女子マネは男子更衣室に普通に入ってくる

水泳部の男子更衣室は、毎日の練習後の光景が繰り返されていた。春の訪れと共に、新しい一年が始まり、更衣室はいつも通り、男の子たちの笑い声と活気で満ちていた。

武士、広志、健司、真一という四人の部員たちは、練習後の解放感に包まれながら、更衣室に入つていった。湿った空気が漂う中、彼らは自然に水着を脱ぎ始める。武士の水着から解放された彼の下半身から、おちんちんが露わになる。彼の身体は、練習の跡がくつきりと残り、その中でおちんちんが微かに動く。広志もその隣で、水着を引き下げ、平然と裸になる。彼のおちんちんも、自然にそこにあるだけだ。彼らの身体から水着が滑り落ちていく様は、まるで日常の一部だった。

「おっ、今日もいい練習だったな！」「いやー、もう限界だったよ、俺。」と、武士と広志が笑い合う。更衣室は、汗の匂いと夏の空気が混ざり合い、少し湿った空気が漂っていた。健司が「うわ、疲れた疲れた」と言いながら水着を脱ぎ、彼もまた、自然に裸になる。健司のおちんちんは、他愛もなくそこに存在している。真一も同じように、何の抵抗もなく水着を脱ぎ捨てる。彼のおちんちんも、まるで何も気にしていないかのように、そこに存在していた。

そんな中、女子マネージャーの美咲が、練習後のミーティングの連絡をするために、何の前触れもなく更衣室に入ってきた。彼女は、更衣室のドアを開くと、男の子たちの裸体を見ても、まるで日常の風景を見るかのように平然としていた。美咲の視線は、武士や広志の身体に一度も焦点を合わせることなく、ただ目の前の仕事に集中していた。彼女は、武士のおちんちんが少し動くのを見ても、まる

で何も見ていないかのように、次の仕事に進んだ。

美咲は、更衣室の床を足で軽く払い、部員たちの間を歩き始める。彼女の視線は、資料の確認や、部員たちの顔に向けられていた。男子部員たちのおちんちんが視界に入ることはあっても、彼女の表情には微塵も動搖が見られない。美咲は、まさにプロフェッショナルで、仕事に徹していた。彼女は、資料を配りながら「次のミーティングの時間、忘れないでよね」と声をかけると、武士が「分かってるよ、美咲」と答える。彼は、水着を完全に脱ぎ捨て、裸のままで美咲に向かって話す。美咲の視線は、彼のおちんちんに一度も留まることなく、次の仕事に移っていた。